

# グアム日本人学校における言語の教育

前グアム日本人学校 校長

静岡県浜松市立神久呂小学校 校長 馬 潤 豊

キーワード：日本語力の鍛錬，英語活動の実践

## 1. はじめに～戦争と観光の島グアム～

グアム島は世界で一番深い海マリアナ海溝からそびえる火山島だ。エメラルドグリーン珊瑚礁と紺碧の海が美しい。この海域で発生した熱帯低気圧が発達して台風となり日本に向かい北上する。人口約17万人のうち、昔からの住民であるチャモロ人が半数、次が多いのがフィリピン人で4分の1、在留邦人は、3,740人(2007年10月)。日本からわずか飛行機で3時間半の距離にありながらアメリカ領である。島の経済は米軍の需要と観光に依存している。連邦政府からの補助金、給与支払い、軍の調達費用などは総額10億ドルに達する。



グアム中心部からホテル街を望む

グアムは、太平洋戦争当時からベトナム戦争や最近のイラク戦争などでもずっと戦力的に重要な基地であり続けている。日本軍が本土防衛の要として重要視したこの島を占領し戦争に巻き込んだ歴史があり、占領下の時代を知っている人たちの中には深い傷を負っている人たちもいる。ちなみにグアムの一番大きな行事は、アメリカ軍によって奪還された日を祝う日本からの「開放記念日」である。

日本人観光客は、年間100万人近くを数え、島の就業・経済に最も大きな貢献をしている。ホテル通りは、日本の繁華街かと思うほどに、日本人観光客でにぎわっている。

## 2. ゆれる保護者の思い

年々日本人学校に通う子どもの家庭環境は変わってきている。以前は、企業の駐在員や在外公館の家族が中心であったが、英語力を身に付けるために現地校へ入る子どもが多くなり、国際結婚等による海外定住の家庭の子どもの割合が増えている。

このような保護者は、「将来、わが子がアメリカ社会で生活していくためにはネイティブと同等の英語力も付けさせたい。」「現地校に編入したときに英語力が足りないために下の学年に入ることがないように、現地の学校で必要な英語力を身に付けてほしい。」「アメリカで暮らすチャンスを得たのだから英語力を付けて帰国させたい。」という願いをもっている。その一方で、「日本語と母国の文化、そして、日本の高い学力を身に付けさせたい。」「きめ細やかでレベルの高い日本の教育に触れさせたい。」という気持ちも捨てきれずに、日本人学校入学を決断するのである。

そこで、日本人学校のできる範囲で最大限に保護者の願いに答えるべく、日本語、英語の2つ言語力を伸ばす実践に力を注いだ。

言語を母語のレベルで身に付けるということは、2つの言語で生活をしている子どもたちにとっては大変難しいことである。当然ながら、英語については、学習指導要領の範囲では限りがある。グアムの実態に即し、将来国際人として生きる子どもたちのためにできる限りの手を尽くさなければならないと考えた。

### 3. グアム日本人学校の国語教育

#### (1) 日本語にハンデを背負う子どもたち

子どもは無意識のうちに体験と共にたくさんの言葉の刺激を（良いものも悪いものも含め）受けて言語を身に付けるものである。日本語は、日本人としての感じ方や考え方も形作る基盤である。国際結婚家庭で家庭内での会話が英語であったり、グアム島内での生活経験しかもたなかったり、母語確立期まで現地校で過ごしたりした子どもたちは、大きなハンデを背負って日本人学校での国語学習を始めることになる。だからこそ、日本人学校を選択した保護者や子どもたちの期待に応えるよう日本語環境を意図的に提供する責務があると考えた。

また、グアムで子どもたちの言葉の発達を見ると、人間の脳が10歳くらいにまでに母語を形成しやすいようできているということがよく分かった。小学校低学年まで現地校に通い編入してきた子どもたちはネイティブのように英語の発音ができるし、現地の保育園に入った派遣教員の子どもたちはわたしたちには、聞き取れない（発音できない）英語にもすぐ慣れる。一見完璧な英語を話しているように見えるが、子どもの会話の域を出ないし、正しく文字で書くことはできない。2つの言語の中での生活を余儀なくされる子どもたちにはどちらも中途半端なものになりやすいのである。文章を正しく書いたり理解したりする力、語彙や文法は意識的・計画的に育てなければ身に付かない。

#### (2) 日本語力を鍛えるための実践

##### ①体験と日本語環境の不足を補う読書習慣の定着

- 小学部の1日を朝読書で始める。
- 小・中学部ともに年3回の読書月間（5月・11月・2月）を設ける。
- 高学年による読み聞かせ。5年生から中学部までの学年が4年生以下の子どもたちのために読み聞かせを行う。
- 表彰制度  
読書月間の最後にたくさん読書をした児童生徒を「読書王」として表彰する。

##### ②意図的な指導での文章力強化

- 「書くこと」を中心とした単元の国語科研究授業で教員の指導力を向上する。
- 技能や文種などに焦点をあてて書かせる週末課題作文（小学部）、週末トピック作文（中学部）で文章力を育てる。
- 文集「椰子」の発行（学年末）、小文集「あおぞら」の発行（毎週）で書くことへの意欲の向上を図り、指導の成果を確認する。
- 日記指導で書くことの習慣化を図る。

##### ③全校漢字力コンテスト

年1回学年で学習した漢字の読み・書きの確実な定着を図る。

##### ④音読集会（月1回）

日本語のよさを体感し、日本語を愛する気持ちを育てる。

### 4. グアム日本人学校の英語教育

将来の進学や仕事の舞台がアメリカである児童生徒が多いこと、アメリカ社会に暮らし、国際語としての英語の必要感を最もよく理解でき活用できる環境にある立地を考慮し、中学部の外国語科に加えて全学年で英語活動を行った。

#### (1) 外国語科（中学部）

「読む」「書く」「聞く」「話す」の4領域にまたがる基礎学力の充実を図るとともに、3年間の学習を終えるまで

に英語検定2級取得を目標とした実用的な英語の運用能力をも育てる。

## (2) 英語活動（全学年）

- ネイティブの講師による英語を使用した英語授業により「読む」「書く」「聞く」「話す」の4領域にまたがる総合的な英語運用の力を育成する。
- アメリカやゲアムの自然・文化をテーマに調べたことや自分の考えを英語でまとめ発表し、英語でのプレゼンテーション能力、異文化に対する関心や理解を深める。（小学部3年～中学部3年）

## (3) 英語活動の位置付け

小学部1・2年生は「裁量の時間（3時間）」

小学部3・4年生は「裁量の時間（1時間）」と「総合的な学習（2時間）」

小学部5・6年生では「英語活動（1時間）」「総合的な学習（2時間）」

中学部は、「選択外国語（2時間）」と「総合的な学習（1時間）」



黄色のスクールバス

## (4) 経過

- 第1年次・・・ネイティブの講師の質の向上と組織的な授業へ

日本人には、ネイティブ崇拝とも思えるほど、アメリカ人やイギリス人などの英語を聞かせることがレベルの高い英語教育だと考えている節がある。赴任して驚いたことには、ネイティブの英語講師が英語文を読み、練習問題を解かせ、答え合わせをするだけの機械的作業で役割を果たしていると考えていることであった。これは雇用する側の問題であり、1年をかけ校長と英語担当教師が講師希望者と面接を行い、教育者としてふさわしい人物に入れ替えた。

- 第2～3年次・・・教材の整備とカリキュラムの構築

英語力のレベルと精神的発達に適した教材の発掘をした。現地校で教師をした経験をもつ英語教師のアドバイスを受けながら、宗教色のないものを探さなければならなかった。

小学部1年生から「英語活動」の時間を、中学部は選択教科としての「英語」をそれぞれ週3時間特設し、英語で「聞く・話す・読む・書く」力の向上に努めた。

1年次は8つのクラス分けで行っていた英語活動を、新たに12のクラス（小1～3、小4～6、中学部の3学年団のクラスをさらに、下記の指導の目的別に4つに分ける）にし、子どもの発達や育った言語環境などに一層沿ったものにした。

なお、子どもたちが意欲的に学習に取り組むことを第1にし、学習状況を継続的に観察・評価し子どもとの相談の上より適切なクラスへ移動させた。

## (5) 指導体制・方法

- 英語担当をコーディネーターとし、経験豊富なネイティブの講師4人を採用。
- 日本人教師が各クラスの授業を観察したり、毎日提出される講師の授業反省用紙を参考にしたりして児童・生徒の様子、授業の進捗等を把握する。必要であれば、学級担任を通して保護者へ連絡を入れる。

- 年間カリキュラムを用意。児童生徒の実態に合わせて進度を変えることがある。余裕のある時や季節の行事に合わせて読み物教材やゲーム等を加えることがある。
- 週1回の単語の小テストを行う。SPECTRUM Spelling（教科書）を使用していないクラスについては、講師が使用した教材の新出単語で行う。
- 各学期の授業報告としてProgress Reportを発行し、本人、保護者、学級担任に英語の授業の様子を知らせる。
- 通知表には「関心・意欲・態度」「聞く力」「話す力」「書く力」「読む力」を観点にしてABCで評価する。
- 異文化理解の授業では、調べ学習と英語でプレゼンテーションを行わせ、発表ごとに講師がコメントで評価する。

## 5. まとめ

グアム同様、海外に進出している企業では駐在員を減らし、現地職員の採用を増やす傾向にあるようだ。また、児童・生徒が現地校やインターナショナルスクールへ流れる傾向が加速していると聞く。日本人学校に就学する子どもたちの変容は、グアムだけの問題ではなくなってきている。日本語力と基礎学力の低下、家庭環境、進路の複雑化や少なくなった学校予算の効率的執行など、以前日本人学校に赴任したときとは違う新たな課題に直面した。

日本人学校経営の安定化は学校理事会の一員であり、学校教育の主体である校長の職務である。これからの日本人学校の校長には地域の実態に即した柔軟な学校経営を行う適応力と創造力が一層求められるようになるであろう。